

2020年NPT再検討会議第1回準備委員会： 核兵器法的禁止交渉の影響は？

中村桂子

2017年5月2日～12日、2020年核不拡散条約(NPT)再検討会議に向けての第1回準備委員会がオーストリアのウィーンで開催された。オランダのファン・デル・クワスト軍縮代表部大使が議長を務め、111カ国の参加があったと伝えられる。最終日、議長の責任でまとめた作業文書として136項目からなる「議長概要(サマリー)」が発表され、閉幕した。

2週間の会期を通して、参加国からはNPT体制の重要性が異口同音に述べられたが、同時に、核軍縮の歩みの遅れに対する非核兵器国の不満、前回の再検討会議の決裂の要因ともなった先の見えない中東問題といった「おなじみ」の対立構造もあらためて浮き彫りとなった。そうした中、各国間の認識の違いが際立ったのが、3月にニューヨークで始まった核兵器禁止条約交渉とNPTの関係であった。

核兵器の法的禁止をめぐるこの間の議論においては、新たに作られようとする条約がNPT体制にどのような影響を及ぼすか、各国の立場により真っ向から異なる解釈がなされてきた。推進側の国々は核兵器禁止条約がNPTと完全に一致するものであり、核軍縮義務を定めた第6条の履行の促進につながると主張してきた。他方、核保有国や核抑止依存の国々は、コンセンサスに基づくアプローチをとらない核兵器禁止条約は締約国間の分断を生み、NPT体制を弱体化させ、よって核軍縮の実現を遠のかせる、という論を展開してきた。

今回の準備会合の議論においても、核保有国や核抑止依存の国々は、禁止条約制定の動きに対し、「役に立たず、非生産的で、一時の気の迷い」(ロバート・ウッド米大使、5月4日)といった辛らつな口調でその弊害を訴えた。しかし、禁止条約が実際どのようにNPTを弱体化するかに対する具体的な説明は不十分なままであり、また、核軍縮を前進させるための新たな提案を出すこともなく、従来の「ステップ・バイ・ステップ」や「プログレッシブ(漸進的)」アプローチの有効性が繰り返されるに留まった。

同様の物足りなさや日本の提案にも感じられた。禁止条約交渉に背を向けたその姿勢が被爆地をはじめ国内外の厳しい批判に晒される中、日本政府に期待されていたのは、「核兵



準備委員会会場のウィーン国際センター 撮影:RECNA

器国と非核兵器国の橋渡し役」としての具体的中身を伴ったイニシアティブを示すことだったろう。しかし、今回の準備会合に閣僚級として唯一人出席した岸田外務大臣が出した提案は、核兵器国・非核兵器国の有識者による賢人会議の設置といった、「問題の先送り」とも捉えかねられないものであった。核軍縮・不拡散分野での賢人会議には日豪政府が共同でイニシアティブをとった2008年設立の「核不拡散・核軍縮に関する国際委員会(ICNND)」などの前例があり、その成果は日豪政府の実際の政策に一定の影響を与えているが、採用されていない提言も多い。当然ながら選ばれるメンバーにも左右されるだろう。この賢人会議が、核兵器国や核の傘を禁止条約に巻き込んでいく具体的プロセスを提示する役割を担うのであれば歓迎したい。

次回の準備会合は、2018年4月23日～5月4日にジュネーブで開催され、禁止条約制定後初の準備会合となる可能性は高い。禁止条約に署名批准しない国々はますますその説明責任が問われることになるし、推進側の国々にとっても、禁止条約を梃子に核軍縮義務の履行を迫る新たな戦術やレトリックが求められることになる。「おなじみ」の議論に新しい風が吹くことが期待される。

(なかむら けいこ、准教授)

本年度(2017年度)核兵器廃絶研究センター(RECNA)では、「長崎被爆・戦後史」研究会を立ち上げた。

私は、広島と長崎の両市の「復興」を被爆者の視点から再評価することに取り組んできた。テーマとの出会いは、広島での院生時代にある。知り合いになった被爆者の方々から「復興」への違和感を耳にした時の衝撃からだった。広島に住んだ当初から、広島での「復興」を「奇跡の復興」と感嘆していた。しかし、広島で暮らしてきた被爆者から見た「復興」は、私から見るそれとは、随分と違いがあることに気が付いた。被爆者と同時代に生き、その声を直接に聞くことのできる研究者として、改めて被爆地の「復興」を被爆者の視点から検討し、残す意義があると考えて研究に取り組んでいる。

被爆体験そのものに限らずに、戦後史においても、被爆体験者と被爆を体験していない人びとの意識の隔たりは埋めることができないほどに大きく深い。しかし、その隔たり自体、被爆を体験していない人びとには見え難い。

被爆から120年後の2065年、被爆体験者がおられなくなった世界で、私たちは被爆体験をどのように語り、被爆後の歴史を綴っているのだろうか。そのように考えた時、いま取り組むべき課題は多い。戦後72年という歳月の中で取り組まれてきた、記録や研究の数々を、被爆地から生まれた人類の知的遺産として受け止め、被爆者をはじめ市民の人々と共に議論を行いながら、検討することはできないだろうか。その問題意識が研究会の出発点には存在している。これらの活動の原点

は、核兵器を投下する側の議論ではなく、核兵器によって被爆した者の声に他ならない。

本研究会は具体的な実践の場として、長崎の問題に取り組んできた研究者や市民運動家、有識者たちを招聘し、報告を聞き、参加者を含めて自由な討論を行う。その作業を通して、長崎の被爆体験と戦後史から、被爆を直接体験していない世代が継承すべき課題と意義を明らかとすることを目的とする。

さて、6月2日に開催した第1回目の研究会では、ほぼ半世紀「長崎にあって哲学する」という活動を続けてこられた高橋眞司氏(元長崎大学教授)をお招きし、被爆者の「死と生」、「戦前責任と平和責任」、3・11後の「核暴力」の諸問題について報告を伺う場を設けた。研究者をはじめジャーナリストや有識者、およそ25名の参加があり、報告者と参加者との間で活発な議論が行われた。特に、「浦上燐祭説」を巡る解釈や「祈りの長崎」との繋がり、更には長崎の「二重構造」に対する評価について議論が交わされた。また、長崎被爆における「三菱の問題」があがり、今後の研究会においても引き続き検討するテーマであると確認された。

研究期間は今年度と来年度の2年間とし、1年に前期と後期の2回の研究会を計画している。次回の研究会は、2017年12月の予定である。

(きりや たえこ、RECNA客員研究員)

ナガサキ・ユース代表団

ウィーンでの活動

「ナガサキ・ユース代表団」5期生の9名は、5月2日～12日にウィーンで開催された2020年NPT再検討会議第1回準備委員会に参加した。現地では、会議の傍聴の他、韓国の大学生との協働による国連内自主ワークショップの開催、ウィーン市内の日本人学校での出前講座、在ウィーン国際機関の訪問、各国から集まった外交官・NGO関係者・同世代の若者らとの意見交換など、連日にわたって精力的な活動を展開した。より詳しい活動の様子についてはブログをご覧ください。

<http://www.recna.nagasaki-u.ac.jp/recna/youth-blog-2017>

教育の重要性を再確認

ナガサキ・ユース代表団5期生 光岡華子

5月5日、私達はウィーン日本人学校で出前授業を行いました。小学校1～3年生の29名、小学校4年生～中学生の21名の二つに分かれて、私は低学年のグループで授業を行いま



した。“核兵器の問題は昔の話ではなく、今の自分たちにも関係がある”ということ子どもたちに伝え、感じてほしいという想いで実践に取り組みました。

授業の間、子どもたちは真剣に私の話を聞いてくれました。純粋な子どもたちが私を見る目には、この子たちのために全力で向き合おうという気持ちにさせられ、より良い未来を願うのは

決して自分たちのためだけではなく、目の前の子どもたちのことを思うからであると、自分の中にある使命感を再確認しました。その子たちが平和な世界を築いていけるか、そこに教育が与える影響はとて大きなものであるため、教育の重要性も改めて感じました。

この経験をもっと多くの若者にしてほしい！もっとこの授業を幅広く提供したい！と思い、現在、この事業を行う団体を設立したいと考えています。これまで私は、核兵器のない世界は必ず来るということ信じ、希望を持ち、行動を続ける多くの人たちと出会い、刺激を受けてきました。今度は私自身が、誰かに影響を与えられるような存在になりたいと思います。

(みつおか はなこ、長崎大学教育学部4年)

肌で感じた世界の動き

ナガサキ・ユース代表団5期生 酒井 環

ウィーンに滞在し、NPT再検討会議の傍聴やサイドイベントの参加をして私が感じたこと、それは多くの方々との「出会い」を通して自分の成長を実感できたことです。ウィーンで、国連内での出会いはどれほどだったでしょう。実際に会議を傍聴し、その国の生の意見を肌身で感じていたことはもちろん、政府関係者の方や、国際機関職員の方、NGOの方、同世代の大学生や高校生など、ウィーンに滞在していた2週間ほどで多くの

人々と出会い、国際的な視野を広げ、これまで以上に成長することができました。

その中でも、最も印象に残っているのが国際原子力機関(IAEA)でのショートブリーフィングです。本来ならば絶対に見ることも、体験することもできなかったことが今回多くの方々の支えで実現しました。

私達はこれまで事前学習として、IAEAについても学んできましたが、今回実際に使用されている器具を用いて実演されているところを見て、体感して、改めて国際機関が担う役割の重要性を再認識することができました。

それというのも、会議の中でIAEAをはじめ国際機関の働きが重要であるという内容の意見を述べられる国が数多くあったからです。だからこそ、こうして実際に自分達でその業務を体感し、時には深いところまで質問をしていく中で、改めてこの一つひとつの仕事が核不拡散を進める一つの重要なステップになっているのだと感じました。

他にも多くの方々との出会いの中で学び、感じ、改めて現代の核情勢について主体的に考えることができた私たち5期生。だからこそ、この経験から今後のユース代表団5期生として積極的に活動し、さらに自分たち自身も高めていきたいと思いません。

(さかい たまき、長崎純心大学人文学部2年)

RECNAの活動

2017年4月1日～2017年6月30日

4月3日(月) ～4月5日(水)	■クリティカル・イシューズ・フォーラム 一軍縮教育国際会議(長崎) 鈴木センター長、中村准教授	4月20日(木)	■商工会議所講演会 中村准教授
4月15日(土)	■2017年度日本軍縮学会研究大会 「核兵器禁止条約に向けた国際動向」 黒澤満(RECNA顧問) 「国際司法における核兵器:マーシャル諸島の提訴の意義」 広瀬副センター長 東京工業大学	4月21日(金)	■ゲルニカ爆撃80年 国際人道法と武力紛争犠牲者国際会議 “Challenge of Nagasaki University” 広瀬副センター長 United Nations University for Peace (コスタリカ)
4月17日(月)	■RECNAラウンドテーブル(東京) 講師: グレゴリー・カラーキー博士 (Union of Concerned Scientists)	4月25日(火)	■国際赤十字・赤新月運動核兵器禁止及び廃絶に係る会議 講演: 吉田副センター長 ホテルニュー長崎
4月19日(水)	■The 15th Model United Nations Conference at University for Peace Keynote Speech: 広瀬副センター長 United Nations University for Peace (コスタリカ)	5月2日(火) ～5月12日(金)	■2020年NPT再検討会議第1回準備委員会 モニタリング(ウィーン) 調副学長、鈴木センター長、中村准教授、 ナガサキ・ユース代表団
4月20日(木)	■九州地区大学図書館協議会総会 講演: 吉田副センター長	5月9日(火)	■長崎県立長崎東高校スーパーグローバル ハイスクール意見交換会 広瀬副センター長
		5月10日(水)	■第33回RECNA研究会「南太平洋における 英国の核実験の歴史と日本」 講師: Nic Maclellan氏 (ジャーナリスト)

- 5月15日(月) ■Dr. Ole Christian Reistad, Institute for Energy Technology, Norway 来訪
鈴木センター長、広瀬副センター長、中村准教授
- 5月22日(月) ■長崎市立黒崎中学校平和学習
講師: 吉田副センター長
- 5月27日(土) ■平成29年度第1回核兵器廃絶市民講座
「トランプ政権の核政策と日本」
講師: 太田昌克(RECNA客員教授)、吉田副センター長
コーディネーター: 鈴木センター長
長崎原爆死没者追悼平和祈念館
- 5月30日(火) ■Georgetown University Qatar 学生来訪
吉田副センター長
- 6月2日(金) ■第1回RECNA「長崎被爆・戦後史」研究会
「長崎にあって哲学する-その発端・構想・展望」講師: 高橋眞司(長崎総合科学大学「長崎平和文化研究所」客員研究員)

- 6月7日(水) ■ナガサキ・ユース代表団5期生活動報告会
- 6月11日(日) ■第29回「ながさき平和大集会」
ナガサキ・ユース代表団
良順会館 長崎大学医学部
- 6月19日(月) ■核兵器廃絶長崎連絡協議会総会
長崎大学図書館多目的ルーム
- 6月19日(月) ■2017年度版核弾頭・核物質データポスター完成記者会見 RECNA会議室
- 6月20日(火) ■長崎県立長崎東高等学校平和学習
講師 吉田副センター長
- 6月22日(木) ■韓国全北大学校短期留学特別講義
広瀬副センター長
- 6月24日(土) ~6月25日(日) ■「北東アジアの平和と安全保障に関するパネル(PSNA)」会合 ウランバートル、モンゴル
- 6月28日(水) ■「北東アジアの平和と安全保障に関するパネル(PSNA)」報告記者会見 RECNA会議室

お知らせ

平成29年度核兵器廃絶市民講座

「核兵器のない世界をめざして」

第2回「ヒロシマ・ナガサキのメッセージを世界にそして未来世代に〈核兵器のない平和な世界をめざす平和首長会議の活動〉」

講師: 小溝泰義 広島平和文化センター理事長
聞き手: 森永 玲 長崎新聞論説委員長/RECNA客員教授

日時: 2017年7月22日(土) 13:30~15:30
場所: 国立長崎原爆死没者追悼祈念館

第3回「核兵器禁止条約への動きとこれからの展望」

講師: 中村桂子 RECNA准教授
日時: 2017年9月2日(土) 13:30~15:30
場所: アルカス佐世保 大会議室A

※いずれも、受講料は無料、参加申し込みの必要はありません。

RECNA叢書第2巻刊行

ハロルド・ファイブソン、アレクサンダー・グレイザー、ジア・ミアン、フランク・フォン・ヒッペル著、鈴木達治郎監訳、富塚明訳『核のない世界への提言: 核物質から見た核軍縮』がRECNA叢書第2巻として法律文化社から刊行されました。定価は3,500円(税別)です。お近くの書店等でお求めください。



世界の核弾頭・核物質データポスター

2017年度版「世界の核弾頭データポスター」および「世界の核物質データポスター」が完成しました。日本語版はA1版とA2版があります。英語版とハングル版はPDFのみです。いずれも次のURLからダウンロードすることができます。

<http://www.recna.nagasaki-u.ac.jp/recna/nuclear>

日本語版のポスターをご希望の方は、RECNAまでお問い合わせください。

(数に限りがあります)



2017年4月1日付け人事

客員教授 太田昌克 共同通信社編集委員(論説委員兼務)

RECNA ニュースレター

長崎大学核兵器廃絶研究センター

第6巻1号 2017年6月30日発行

発行 長崎大学核兵器廃絶研究センター
〒852-8521 長崎市文教町1-14
Tel. 095-819-2164 Fax. 095-819-2165
E-mail: recna_staff@ml.nagasaki-u.ac.jp
<http://www.recna.nagasaki-u.ac.jp/>

印刷 インテックス

©2017 長崎大学核兵器廃絶研究センター